

# 世界の子供たちと向き合っ

生協は平和で豊かなくらしを願ってつくられました。現代における真の「豊かさ」と「貧困」とは何か。世界中の貧困や災害取材するフォトジャーナリストの安田さんに、貧困の対極にある豊かさについて教えていただきました。



やすだ なつき  
講師：安田菜津紀さん  
フォトジャーナリスト。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。他にもテレビやラジオのコメントーターとしても幅広く活躍中。

## 私たちの身近にある「貧困」

皆さんは貧困とは何だと思えますか？食料や水がない状況のことでしょうか。私は、「**機会の欠如**」だと考えます。勉強や仕事をする機会がない、自分らしく生きる機会が奪われる…そう考えたとき、貧困は決して遠い国の話ではないことに気が付きます。

私たちに必要なのは想像です。世界や日本で起こったことについて「もし自分だったら」と想いを馳せ、想像を広げていきましょう。

## 自分が辛くても誰かを想える強さ

私が初めてカンボジアを訪れたのは16歳の時です。そこで出会ったのは人身売買の被害にあった子どもたちでした。カンボジアは内戦の終結後に貧困層が農村部に集中し、経済的な理由で親が子どもを売ることも珍しくありませんでした。値札を付けられ、売り買いされた子どもたち。1日中物売りや物乞いをさせられ、稼ぎが悪いと

ひどい暴力を受けたといえます。

そんな状態から保護され、援助施設で暮らす彼らは「自分には今、暮らす家も食べ物もある。でも、残された家族はきっと困っている。家族を支えるために早く仕事に就いて収入を得たい」と、自分以外の誰かを想える強さを持っていました。私は強くて優しい彼らから、人として大切なことを教わりました。分けていただいた言葉や経験を世界中に伝えることで、彼らに恩返ししたいと考えています。

近年は政府の対応も積極的になり、カンボジアの人身売買問題は少しずつ改善に向かっていきます。

## 戦争に機会を奪われた子どもたち

一方で、日が経つごとに希望から遠のいている国もあります。

2009年ごろ、私はシリアに通い詰めていました。当時は美しく人々も温かな国でした。シリア人は非常におせっかいで気遣い上手、人間関係こそが彼らの「豊かさ」の根源でした。その豊かさは6年8カ月の戦争により、粉々

にされてしまったのです。子どもたちは戦争の影響を確実に受けています。

11歳のムハンマド君はシリアに住んでいましたが、戦火を逃れて一家でヨルダンに避難してきました。空爆に巻き込まれた父親とは、今も連絡がとれません。ムハンマド君はごみの中から鉄くずやパンのかけらなどを集めて売り、家計を支えています。彼の母親は「この子は学校に行くのが大好きだった。こちらでも通わせてやりたいが、この子が学校に行くと一家の収入がなくなる」と葛藤しています。彼は戦争によって学ぶ機会を奪われたのです。



また、戦火を逃れたとしても、経済的に厳しい子どもたちから先に犠牲になってしまいます。

私はアブドラ君という5歳の男の子に出会いました。彼は自宅で爆撃にあい、落ちてきた天井の破片が頭に刺さって治療中でした。意識はなく、声をかけても空を見つめるだけ。私は少し迷いましたが、アブドラ君の痛々しい姿を写真に撮り、彼の母親に渡しました。彼女は「嬉しいわ。写真は焼けてしまって1枚もなかったの。今度は元気になったこの子を撮りに来てね」と喜んでくれました。

その少し後、一時回復したアブドラ君の容体は急に悪化。高度な治療を受けるお金もなく、彼は生きる機会を奪われてしまったのです。

### 講演会後の質疑応答で…

組合員 私たちにも日常の中でできることはありますか？

安田さん 日常の中に世界のことを思い出し、考えるヒントを広げていきましょう。例えば、私は友人の誕生日によく、シリアで作られた「アレッポの石鹸」を贈ります。



▲オリーブオイルソープ アレッポの石鹸 宅配にて3月4回、4月4回取り扱い予定

アレッポはシリア北部にある都市。近年、内戦状態にあったアレッポは、良質なオリーブ油とローレルオイルを使った石鹸づくりでも有名でした。アレッポの石鹸は単に贈り物としても喜ばれますが、この石鹸をもらった人は、使うたびにシリアについて考える機会が生まれます。意識を向けられていけば、募金などの次の行動につながる可能性があります。こうして、関心の輪を広げていくことができるのではないのでしょうか。ぜひ参考にしてみてください。

## 想像と共感で生まれる一筋の希望

東日本大震災のわずか1カ月後、私は陸前高田市の仮設住宅を訪れました。その際、住民の方にシリアの状況をお話したところ「シリアの子どもたちが厳しい冬を越せるように」と、仮設住宅中の不要になった服や物資を段ボール10箱分も集めてくれました。「自分たちは世界中からの支援で立ち上がったから、今度はこちらから恩贈りをしたい」と言ってくれたのです。

彼らは自らも厳しい状態に置かれているからこそ、故郷や大切な人を理不尽に奪われた経験に共感し、シリアの子どもたちのくらしを想像することができるのです。

## 無関心こそが人を追い詰める

シリアで避難生活を送る人はこう話しました。「私たちを本当に追い詰めるのは政府でも兵器でもない。今ここで起こっていることに、世界の人々が『無関心』であることだ」。

世界の貧困をなくすために今すぐできるのは、想いを馳せて想像することです。世界で起こっていることに関心を寄せ、問題意識を分かち合うことが、子どもたちの笑顔があふれる豊かな社会の第1歩になると信じています。